

AIアドバイザーリーボード総会 議事抄録

日時：2021年4月19日（月）15時～17時

場所：豊洲センタービル10階 Inforium（及びZoom）

出席者：森川座長、石川委員、三部委員、奈良委員（Zoom参加）、成原委員（Zoom参加）

NTTデータ 藤原副社長、富安統括本部長、谷中事業部長、富岡総務部長、雨宮本部長（Zoom参加）

プログラム

時刻	アジェンダ	時間	発表者
15:00 - 15:05	座長挨拶	5分	森川先生
15:05 - 15:20	主催者挨拶	15分	NTTデータ 藤原副社長
15:20 - 15:40	メンバ紹介	20分	全員
15:40 - 15:55	NTTデータの取組み	15分	NTTデータ 雨宮本部長
15:55 - 16:45	ディスカッション	50分	全員
16:45 - 16:50	閉会挨拶	5分	森川先生

議事概要

（1）座長挨拶

座長の森川先生から本日のキックオフ開催に向けた挨拶が行われた。

（2）主催者挨拶

主催者を代表してNTTデータの藤原副社長から、「会社紹介」「AI活用の取組み」「AIガバナンスの取組み」「AIアドバイザーリーボードへの期待」のプレゼンテーションが行われた。

（3）メンバ紹介

参加者全員が順番に、自身の所属と専門分野等の自己紹介が行われた。

(4) NTTデータの取り組み

NTTデータの雨宮技術開発本部長より、NTTデータにおけるAI活用案件の事例紹介、「安心・安全で信頼性のあるAIの社会実装」に向けた取り組みとして、NTTデータグループのAI指針(※1)の紹介や、開発を進めている「AI開発プロセス(※2)」や「AI品質アセスメント(※3)」の紹介があった。

(※1) <https://www.nttdata.com/jp/ja/news/release/2019/052900/>

(※2) <https://www.nttdata.com/jp/ja/news/release/2020/063000/>

(※3) https://www.nttdata.com/jp/ja/news/services_info/2020/101400/

(5) ディスカッション

「主催者挨拶」、「NTTデータの取組み」のプレゼンテーションを踏まえて、各委員の先生方から「NTTデータの取組みへのコメント」および「今後のAI関連企業のあるべき姿」の観点からディスカッションが行われた。主な内容は以下のとおり

【石川委員】

取り組みとしては非常に素晴らしいがエンジニア視点を中心なので、ガバナンスとしては改善の余地があるように思われた。エンジニアリングによりAIプロダクトを送り出す開発者の不安の解消や効率化ができれば、最終的にはお客様にも効果が出ると思うので、これがお客様との共創やロングタームリレーションシップと直結してくると本当にガバナンスという形になると思う。

【奈良委員】

「ガバナンス」は一般には意味が捉え難いもので多義的であるから、これを進めるにあたって、御社の考える「AIガバナンス」とは何かを定義をして、対外だけでなく社内にも共有することが必要と考える。トップダウンのガバナンスなのか、ステークホルダーがフラットに関連し共創を目指す形での共治のガバナンスを目指すのかも含めて気になっていた。

【雨宮本部長】

私の組織は研究開発部門ということで、プロセスの策定やリスクの低減という観点に立

ったガバナンスを考えがちであるが、A I 適用のリスクの低減に取り組みつつも、お客様にとっての利益や社会における価値という観点が重要であると思う。頂いた御意見を基に、当社の考えるガバナンスは何かを定義していきたい。

【三部委員】

御社のお取組は、信頼、倫理、ガバナンス、グローバル、持続可能性といった観点を意識されている上に、欧米や日本政府の動きと軌を一にしているものであり、すばらしい。

そのような観点に、もう一つの観点を追加することを提案したい。それは、現行法との衝突問題があることである。法律はA I を想定せずにつくられているため、A I は現行法、法律との衝突が起こりやすい。衝突があった場合の対応策は大きく分けて3つある。法律を遵守する、法律の適用を技術的に回避する、規制の緩和や打破を求める、である。このような現行法との衝突問題を認識し、対応策を練るには、そのための取組やリテラシー教育、プロセスの中への組み込みが大切になる。

なお、「ガバナンス」「リスク」という言葉が出てきたが、人によって違う内容を思い浮かべることが多い概念であるため、どのような意味で論じるのかを整理したほうがよい。

【成原委員】

単にA I 開発プロセスのガバナンスだけでなく、A I 管理プロセスのガバナンスも射程に入れるという点で非常に魅力的な取組で、国際的なA I ガバナンスやA I 倫理の動向とも合致する。

領域に応じてA I のリスクとベネフィットも変わるので、アプローチが変わってくる可能性がある。例えば、官公庁や自治体システムの場合、開発段階で差別防止やプライバシー保護に留意していたとしても、学習データに気づかなかった問題があつて差別的な判断をしてしまったとなると、国民や住民へ重大な影響を与えるので十分留意してガバナンスの体制を築くことが重要になる。NTTデータから見れば直接のお客様は官公庁や自治体、企業になるが、その先には国民や住民、その企業の顧客など、お客様の背後にお客様のお客様、つまり間接的にA I の影響を受ける利用者のことも念頭に置く必要がある。そのお客様にとってメリットがあつて、社会全体にとって望ましいということが大事な視点になる。

【森川座長】

AIガバナンスに関して、NTTデータの中の組織はどうなっているのか。例えば医療画像をやろうとすると、おそらく医療機器認定の担当者を置く必要があるとか、個人情報の問題、あるいは倫理委員会に通すのかなど、いろいろなことがあるが、それとこのAIガバナンスと、どういう位置づけになっているのか、あるいは組織的にこれからどうなるのか。

【富安統括本部長】

これまでは、主に開発プロセスのリスクをヘッジするためのポイントを付け加えるというレベルでやってきたので、今後はAIガバナンスをコーポレートガバナンスまでどうやって昇華させるのかが課題と認識している。

【谷中事業部長】

お客様からはAIガバナンスよりは、データ活用におけるデータマネジメント、データガバナンスの指摘が多い。お客様の課題認識は、AIを使う上での元データの素性がどういうものなのか、即ち、どこから持ってきて、どこで加工して、どういう系譜をたどってきたデータなのかを管理していくことを求めている、幾つかの仕組みを活用しながらお客様のシステムをインテグレートしている。

【富岡総務部長】

コーポレートガバナンスやインターナルコントロール、コンプライアンス、リスクマネジメントなどコーポレートサイドとしての議論を進めている。その中でAIガバナンスをどのように位置づけるのか、非常に重要な示唆をいただいたという認識である。先にあげていただいた医療画像に関しても議論をしているが、AIという観点から一貫通貫の議論はこれからである。

【森川座長】

大きな観点から言うと、データも関係するし倫理的なところも含めて、全て包含できると面白い。それをAIガバナンスという言葉で良いのかどうかだが、NTTデータがやらないのであれば誰がやるのか、そういう大きなところから見ていく必要がある。これから道をつくっていかなければいけないが、非常に重要と思う。

【藤原副社長】

森川さんがおっしゃるとおり、かなり広い観点から物事を考える必要がある。システム構築においてもお客様が求める要件を充足することだけで満足せず、新たなアプローチを会社の意思決定のプロセスに取り込んでいかなければいけないと考えている。

アジャイル開発等においては、お客様自身が最終形の答えを持っていないシステムを構築する際の、広い意味でのガバナンスやリスクマネジメントのやり方を模索しているが、さらにAIになると、学習に用いるデータの品質やそれ等のデータを扱うモデルの進化等も考慮したうえで考えていく必要がある。

【森川座長】

倫理となるとそれだけで幅が広いし、データの権利も経産省がガイドラインをつくったりしながらやっているが、AI開発もそこに含まれるというか、雨宮さんから紹介いただいた開発方法論などは石川先生がおられるので強みになるので、一気に広げていただくと面白いのではないかと。

【三部委員】

この分野で法律や倫理を意識することが今後、重要になってくると思う。日本は総務省のAIネットワーク社会推進会議にて、ソフトローという形で、法律そのものをつくらないで各国が共有できる枠組みをつくっていくことで検討が進んできた。その方向はこれまでは適切だったと考えるが、ヨーロッパとアメリカそれぞれでAIに関する法律をつくる動きが始まっている。それらの国々が、黒船のように突然やってきて、それらの法律を守らなければならないようになったがために、開発中・サービス提供中の案件の全てが後戻りになるということが、日本のAI企業で起きる可能性がある。そのようなことにならないように、グローバル企業は、海外のAI法制化の動きも考慮に入れていかざるを得ない状況になっている。その点に関しては、産官学が協働して今後こういった枠組みをつくっていくかを考えるのも大切だと思う。

そのうえで、本AIアドバイザリーボードにおいて、どこまでを射程に含めるかであるが、個人的にはある程度広いほうが良いと思う。御社としても、AIビジネスのリスクにどのように対処してガバナンスの効いた健全なビジネスを行い、収益につなげていくかは非常に

重要である。また、それを超えて日本という枠、グローバルという枠で考えても、ある程度広げて話を考えたほうが、よい影響を与え、最終的には御社に返ってきやすいと思う。

【奈良委員】

3点ほど指摘したい。1点目は、チャレンジングであるが、様々なハザードに関して国際的に重要な観点であるE L S I (Ethical, Legal and Social Issues)と、ガバナンスを組み込んだ枠組みをつくっていただきたい。経産省が今年の1月15日にA I 社会実装アーキテクチャ検討会で「我が国のA I ガバナンスの在り方の中間報告」を出しているが素晴らしい出来なので、事業というレベルにさせていただくことを期待している。

2点目は、A I ガバナンスにおけるコンシューマーがステークホルダーであることの意義をいま一度、確認しておく必要がある。何故A I ガバナンスでコンシューマーがステークホルダーとして位置づけるのか、ポテンシャルユーザーの多様性を担保したA I ガバナンスをつくっておかないと、結局はよいアウトプットができない。持続可能性を考えると必須の命題だと思う。

3点目は、どのように多様なユーザー、コンシューマーたちに、このA I ガバナンスに参加してもらい、A I を使ってもらえるのか。そのためには信頼を高めることに尽きるということである。市民や消費者は、A I に対して期待はしているが、例えば自分の情報漏洩等により自分の社会基盤や経済基盤が壊されるかもしれないという懸念も持っている。リスク管理者には高い専門性や、透明性がある・公平性があること、また、自分たちと価値を共有していることを、消費者に認識してもらうことが大事になる。

【成原委員】

単に技術開発の在り方だけでなく、倫理やコンプライアンス、組織体制など、様々なアプローチからガバナンスの在り方を総合的に検討していく必要がある。

また、論点として追加したいのは、検討の対象をどこまで広げるかである。A I が単独で利用されるビジネスは少なく、クラウドやI o T、各種のデータ分析と一体的に結びついているので、A I だけを切り出してA I のリスクやビジネス上の可能性、メリットを論じるのはあまり意味がない。他方、広げ過ぎると議論の収集がつかなくなる懸念はあるが、A I だけにフォーカスを当てて他のことを見なくなると現実とずれるので、A I にフォーカス当てつつ、そこからどれくらい広がりを持って射程に含めていくかということ意識

しながら、検討体制の検討や議論を進めていただきたい。

【石川委員】

開発者側の観点としては、健全にシステムづくりができるように、不安と期待、両方から見てバランスの取れた現実的なガバナンスの在り方を探っていただきたい。契約や多様性の観点から様々な要請が出てくると思うが、AIの仕組み上、できないことはできないと伝えた上でないと正しく使ってもらえないので、そのリスクコミュニケーション、何かひたすら説明したという方向だけでなく、本当に責任を持って、できないことはできないと言うことを含めてやっていくことも必要と思う。

【森川座長】

私の期待は、AIを受託ビジネスにはしたくないということである。それを少しでも変えていく1つが、このAIガバナンスと結びつけられると個人的に面白いと思う。今、AIのスタートアップがたくさんあるが、その多くが受託になっていて5年、10年経つとどうなっているか不安である。何か主体的に受託ではない形にドライブできていく分野にしていきたいくて、そうすると必ずAIガバナンスみたいなものも何か関わってくるのではないか。ぜひ、この分野が元気になるように先導していただきたい。

【富岡総務部長】

企業としてのリスクマネジメントは非常に大きなトピックであり、AIのリスクをどのようにコントロールするかというフレームは、国際的な議論もされていると思うので、どう先んじて取り組んでいくのかも 이슈 になってくる。国際的なルールが出来始めてしまうと、その土俵に乗らないといけなくなることの良し悪しの議論も含めて非常に示唆をいただいたと思う。法務等も含めてどうしていくかを考えていく深い領域ということを改めて強く感じた。

【谷中事業部長】

日本はAI活用の先進国として世界をリードしていくべきだと思っている。お客様を、その企業のデータ活用、AI活用をリードしていくというような立ち位置をぜひ確立していきたい。デジタルサクセスというコンセプトで、テクノロジーの導入だけでなく、いか

にビジネス成果につながるか、実際にナレッジやフレームワークを体系化して、プロアクティブにお客様に提案をしながら進めていくことを全社的な大きな流れにしていきたい。

石川先生がおっしゃられたとおり、AIは万能ではないので、「ここまではできます、ただし、ここからは分かりません」といった謙虚な姿勢を持ってAIの活用を進めていくことを我々自身が認識して、対外的にもそういった姿勢を伝えていくことが、AIのガバナンスや倫理的な活用の1つの指針にもなってくるかと思う。

【富安統括本部長】

開発プロセスやデジタルサクセスに注力してきたが、皆さんからのお話は、会社の中の組織や意思決定の方法、さらには対外的にもどういったことをやっていくのかを求められていると理解した。他に同じような動きをしている社はあるのか。

【三部委員】

海外では、既にガバナンスの一環としてAIに関する取組を進めている企業が見られる。外部委員会と内部の組織を組み合わせ、さらに技術系とそれ以外の人材がコラボして取組を進めている企業はかなりある。総務省のご依頼で欧州を訪問した際には、そのような取組をしている企業の代表例を訪問し、どのような工夫をしているのか、情報の経路や承認のプロセスなど内部でどうしているのかを聞かせていただいた。

日本国内でそこまでの取組をしている企業は多くはない。しかし多くないままだと、何かトラブルが起きた瞬間に負の連鎖が起きて全体に波及することが強く危惧される。そのため、御社のような企業がAIビジネスへの対応を早めにするのが、業界の範にもなるし、更にはクライアント企業や、消費者・ユーザーを含む間接的なステークホルダーにも良い影響を与えていくことになると考えられる。それが日本の国際的な競争力を上げていくことにもつながるし、この会社の収益力を高めることにもつながっていくと思う。

【富安統括本部長】

当社もグローバル化しているので、日本でまだだから安穩とはしてられないし、森川先生がおっしゃられたように、この手の話をやることにより、受託ビジネスでリスクヘッジを考えるだけでなく、新しいお客様との共創関係もつくっていきたい。1年かけて、当社がリーディングカンパニーとしてしっかりとしたものを出せるようにしていきたいので、

ぜひお力添えください。

【藤原副社長】

本日、いろいろなお話を伺うことができたが、一般的なITは構築の途中で多少のぶれが発生しても結果は大きくぶれないが、AIの場合は小さなぶれが結果に大きく影響することがあると考えている。単にシステムだけでなく、お客様、その先にいるエンドユーザーである国民に対しても大きなインパクトを与えるものということを改めて感じた。三部先生がおっしゃったとおり、会社としてガバナンスができるような仕組みを整える必要があり、AIの世界でもグローバルなレベルで会社としてきちんと対応ができるような仕掛けをぜひ考えたい。そして、その仕掛けをグローバルに展開していくことを日本の中でも先陣を切って取り組んでいきたいと考えている。

どうぞ1年間、お付き合いを頂ければと思います。よろしく願いいたします。

【森川座長】

初回にもかかわらず、本当に先生方からいろいろな多角的な視点から御意見を頂いた。

これからの時代は関係するステークホルダーが増えるのが本当に大きな違いと思う。今までは1対1のビジネスで良かったのが、1対多・多対多になっているので、その中で価値の創出の仕方が大きく変わってきている。そうすると我々も試行錯誤しながらやっていたかざるを得ない。今回の試みもその1つと思っているので、私自身もすごく期待している。

それでは時間になりましたので、今日はここでお開きとさせていただきます。本日は、どうも本当にありがとうございました。(拍手)

— 了 —